

西往寺所蔵木造宝誌立像の制作事情について

長井 里緒奈 (早稲田大学)

京都西往寺所蔵の木造宝誌立像は、僧形像で面部に縦の裂け目が入り、そこから頭上面と見られる表現を伴った面相部が僅かに覗いた像容をとる。このような特異な造形は、宝誌和尚が十一(二)面観音菩薩に変容するという『仏祖統紀』(咸淳五年<1269>志盤撰)等にみられる説話にもとづくものとみなされるため、本像のモデルは劉宋~梁時代に活躍した神異僧宝誌とされてきた。本発表では、西往寺所蔵宝誌像に用いられた技法、原所在地、本像に付随する縁起に着目し、制作背景を検討する。

まず、本像の特徴のひとつに鉦彫技法を用いていることが挙げられるが、その鑿痕の顕示は、奥健夫氏が「滋賀・天満神社天王像について—鉦彫成立論との関連で—」において提言した鉦彫論の例証となる可能性を提示したい。すなわち、九世紀末頃から十一世紀前半にかけて制作された邪鬼像や夜叉像にみられる像表面に鑿痕を留める技法は、疫神化する樹神としての性格を付与した「荒ぶる神」の属性を表象するという。さらに、その技法が仏菩薩像や神像に転用された場合、疫病を統御する「疫神の上位者としての観音の性格」を表象するために用いられたのではないかと想定している。これを踏まえて、発表者は兵庫温泉寺の本尊十一面観音像をとりあげながら、鉦彫技法が同様の意図によって宝誌像に用いられた可能性を指摘したい。

また、西往寺は元禄二年(1689)奥書の『西往道場中観自在菩薩本縁起文』を所蔵しており、これによると本像は貞享四年(1687)仲秋、西往寺に安置される以前に「伊豆国庭冷山」に所在していたと記される。この「庭冷山」とは、現在の静岡県賀茂郡河津町に位置する天嶺山に当たると推定されている。さらに天嶺山の北麓には平安時代に制作された仏像群が伝わる南禅寺があり、形状や作風が近似する像があることから、すでに指摘されてきたことであるが宝誌像がこの寺に安置されていた可能性を考慮すべきと考える。そこで、発表者は南禅寺周辺の伊豆の地域性、すなわち九世紀後半以降活発になる伊豆半島の火山活動に伴う温泉の湧出に着目する。とりわけ、南禅寺と河津の谷津温泉には、行基による開創伝説、開湯伝説が伝わり、両者の間に温泉とその湯源の管理を行う「温泉寺」との関係を見出すことができるのではないかと推定される。そこで行われる浴客らによる祈りは、温泉療養をする癩者をはじめとした病人らによる切実な病氣治癒への願いがあったと想定することができ、その祈りが宝誌像制作の機縁となり、本像をめぐる信仰が形成されたのではないかと考えられる。

近世の縁起ながら前掲の縁起には、西往寺宝誌像が伊豆の人々に病氣治癒の効験を持つ像として信仰されてきたことが具体的なエピソードと共に記述されている。

本発表においては、これらの観点から本像が、病氣治癒あるいは疫病消除といった願意により制作され信仰されたものであった可能性を示したい。